

第4回亀岡市学校規模適正化検討会議 議事摘録

■日時

平成27年3月24日(火) 14:00~16:10

■会場

亀岡市役所別館 3階会議室

■議事

1. 開会
2. 協議・検討事項
 - (1) 学校区と自治会について
 - (2) 学校規模適正化の主な手法について
 - (3) 意見交換
3. その他
4. 閉会

■意見交換発言内容

(事務局説明「資料1 学校規模適正化検討会議における議論の経過について」、「資料2 中学校区別児童・生徒数及び学級数について」「資料3 学校規模適正化の主な手法及び事例」)

会 長：これまでの議論の経過について何か意見は無いか。

委 員：以前にも申し上げたが、小規模校だからという前に課題があるのではないか。高槻市の檜田小学校へ行き校長から特認校のことを教えてもらった。児童は地域の子の方が少なく、市の中心部からバスで30分あまりかけて通学している。年間5万円のバス代が必要だが、特色のある学校として市街地から来ている児童が多い。PTA会長は地元児童の保護者がしている。夏休みには合宿や農業体験、冬はしめ縄づくり等色々やっている。特認校にすれば市内一円から来られるが、特色が無いと来ない。箕面市の止々呂美でも工夫をしているようだ。亀岡市でも川東小学校・高田中学校が小中一貫校になるが同じことであり、考え方次第で活かせる特色ある学校となり得る。国の地方創生の動きもあるので、それもあわせて考えるべき。

会 長：檜田小学校は特認校制度で、地域内の児童が11人で地域外からは41人と多い。止々呂美小・中学校も小中一貫校の事例である。檜田小学校で校区外から来ている子の理由は何か。

委 員：市街地のマンモス校で勉強するよりも、自然の中で少人数の特色のある教科があり、農業、しいたけづくり、どんぐりの木の植林、しめ縄づくりなどの体験もできること。これが10数年続いており、校長以下、人集めをがんばってやっているそうだ。

委 員：高槻市内で特認校は1校だけか？

委 員：檜田小学校1校だけである。

委 員：地域で放課後の見守りをやっている。1年~3年生を対象にやっているが、今年からは4年生まで拡大する。「こども図書館」は放課後にボランティアと学校が協力し、団地の集会所で開いており1年生~6年生が20~30人集まる。地域の人が見守っているが、統廃合となると一部の学校の子どもだけみるわけにもいかないし、地域でみられなくなる。町で1小学校として残して欲しい。そのためには人数を増やしていく必要があるが、

例えば町内にある市営住宅、府営住宅に子育て世代優先で入居できないか。

会 長：学校図書館を舞台にして学校教育に社会教育の機能も入れており貴重な例。以前に小学校へ講演に行ったことがあるが、亀岡市の中心部でなぜ子どもが減っているのか不思議である。

委 員：減った理由は、市街化調整区域で家が建てられなかったことから。最近の法改正で既存宅地には建てられるようになったが、すぐに家が増えるわけではないので、市営住宅、府営住宅を活かして子どもを増やせないかと思う。

委 員：農業をしたいと大阪から若い夫婦が子ども連れて来て、地元の人の家の離れに住んで農業を始めるといふ例もある。出て行くだけでなく入ってくる人もある。

会 長：自治会の分割についての問題はいかがか。

委 員：檉田小学校は学校の経営を校長に任せているのか？地元小学校の経営状態について校長から説明があるが、やればやるほど手間がかかるし、決まったこと以外はなかなかしにくいようだ。私の地元では、子どもの郷土愛を育てるため、財産区の山を下刈りをし、小学生にどんぐりの木を植林させている。そのときに「誰の山か知っているか？皆の山だから大事にしよう」などと教育しながら、どんぐりを植えさせている。芋掘りなどもして、子どもたちが小さな時に亀岡を故郷と思えるような経験をさせている。京都市等に出た出身者が亀岡に戻って子育てができるように、学校経営の中で、先生も地域も努力すべきだと思う。亀岡市内で自由に学校を選べるようにできないか。

会 長：①ふるさと亀岡への強い思い。かめおかっ子をみなで育てることが大事。②先生はむちゃくちゃ忙しく地域を向いてくれないケースがあるかもしれないが、教師に経験が無いことも要因。地域から具体的に投げかければ動くのではないか。③コミュニティスクールで地域が学校を運営し、理想と思う学校づくりをする校長を雇うという発想、将来はこの方向でいくのではないか。④通学区の弾力化の問題が指摘されたと思う。

委 員：幼稚園の全員 216 人が芋掘りに行き実体験の場を提供してもらっている。どんぐり拾いは散歩コースになっている山で、植林をされたという話は初めて聞いた。4月から卒園者は 16 の小学校へ入学する。幼稚園には市内各地から来ているので、園内外で親子共にダイナミックなつながりが生まれている。そういう意味で地域を離れた付き合いも大事だと思う。今年は園児数が 200 人を切ってしまう。これが小学校の児童数の減少にもつながる。少子化対策をもっと早くからすべきだったと思うが、幼稚園でも地域のことを考えて子育ての方向に転換させていくようにしたい。大阪では選択学校制を開始しており、今年からは入学時から選べるようになった。その結果人気のある学校も無い学校も出てくるが、選択されることにより新たな方策が生まれるという第一歩になるのではないか。

会 長：少子化という根本的な問題がある。学校選択制はオープン・エンロールメントという。

委 員：安詳学区は、新興住宅地で子どもが増え、若者が中心で世代が偏っている。世代が混じっていくためには、まちづくりを変えないといけない。私の育った地域は、第二次ベビーブーマーで子どもが多く、同一地域に 2 つの小学校があるというマンモス校だった。今は生徒が減って 1 校失くなり、中学校と複数の小学校が連携して新しい取組をやっている。学校規模の適正化には色々なケースがあるのではないか。校区の変更、小中一貫

校、学区選択制等々、1つの形だけを選ぶのではなく多様な方法を選択し創意工夫すべきだと思う。

会 長：地域にあった方法で対応していくべきである。小中一貫校の重要な効果で資料に書かれていないことは、子どものつまづき、いわゆる中1プロブレムをクリアできること。

委 員：南つつじヶ丘小学校が一番心配である。子どもが減るのが明らかであり、つつじヶ丘小学校と南つつじヶ丘小学校で校区の変更の話もあるが、自治会活動は小学校区をベースにしているので、校区変更時に意見をよく聞いて慎重に対応して欲しい。

会 長：校区変更には地域の実情と住民の活動を考えるべきということ。

委 員：アンケート結果を見ても、学区域に限界が来ているといえる。マンモス校の先生は悲鳴をあげているし、子どもが少ないと親の協力も少なくなる。バランスを早くとるべきだ。学区を弾力的にしていきたいところへ行く。大人数がしんどい子もいるし自然とのふれあいで伸びる子もいるので自由化を進めるべきだ。ただし急にやらないこと。市民側から言ってもらいようにし、希望に沿って動かしていく。

会 長：合理的な区分けはないのか、制限の撤廃も考えればという意見。

委 員：学校の課題は、大規模校では生徒指導が難しい。小規模校では、中学校での複式学級は進学に影響があるので困る。実際に校区を考えるのは難しい。学校選択制はある程度制限をかけないと、人気のない学校も出てくるので研究が必要。中学校で20人学級では集団を組みにくいのもっと多いほうが良い。校長の持つ裁量は大きく、今でも特色ある取組をやっている。例えば、企業に参加してもらってキャリア教育をやるとか。小規模校が増えると予算的に学校すべてに一式そろえられないので、設備が十分ではない。世代の偏り対策も重要。校区外からの児童・生徒受け入れはスクールバスの路線が多数になり課題である。

委 員：通学区域の問題、少人数校の校区のオープン受け入れ等、各地域の保護者は様々な意見を持っている。その声をどこに持っていけば市として対応してもらえるのか、それをはっきりさせれば声があがってくるはずである。

会 長：住民のニーズをまとめて実現するしくみが必要ということ。

委 員：市からの子育て支援をもっと手厚くしてほしい。子育て施策は亀岡市より南丹市の方が充実しており、そのために南丹市へ引っ越しする人もいる。そこを改善し手厚く支援すれば、子づくりする人が増え子どもが増えるのではないか。

会 長：少子化の問題は大きい。子育てしやすい社会が大事である。

委 員：つつじヶ丘小、南つつじヶ丘小の校区の問題のように、そこに学校が見えているのに校区が違う例が多いと聞く。各地域の事情があるのだろうけれど、変な校区割になっている。

委 員：NPOで高田中において赤ちゃんふれあい授業として、命の大切さに気づき、出産・育児を楽しく思えるように体験活動をした。中学1年生25名をグループ分けしてそこに母子が加わる。生徒は3～4人兄弟が多く、安定した生活をしている印象を受けた。学校の規模が小さいとクラブ活動の分野が偏っていて、成長面の選択肢が少ないのではと感じる。自分の3番目の子どもが京都市内の小中一貫校を卒業したが、英語教育などもあり6～7年生の動きがスムーズだった。一方、PTAでは1年生と9年生の親が同じ

議論をするのは無理があった。篠見晴団地は人口が増加してきたが、世代が替わると団地は終わりになる。自分は亀岡を一旦出た後子育ては亀岡でやってきたが、4人の子どもの内3人は市外に出てしまった。大きな大学や仕事が無いのが主な理由だが、子どもを生きやすく多世代で暮らせる住居など、田舎を否定せずに、少しでも改善して暮らしやすくしていけたら。

委員：私の地域の小学校は卒業生が11人で入学生が8人、差引3人減と小規模校になる。生徒50人に対して見守りが60人と見守りの方が多い。この問題の前に、自治会としてはまちづくりを考えないといけない。2000人規模の住宅開発の話があるので、校区変更を併せて、住宅開発地域を取り込んで、児童を増やせないかと考えている。

会長：ソフト、ハード両面での取組が大事ということ。

委員：学区割は、当初出来たときはベストだった。それが今いびつになっているのであれば直せばよいが、なかなかできない。行政のリーダーシップで直せば良いので、それに対してやぶさかでないという姿勢をもつべきである。学校規模の適正とは何かを考えると、中学校は各学年4～5クラスが適正であろう。大規模校は好きでなく小規模が良いが、複式学級は困る。4～5年後に複式学級が生じると予測される場合は真剣に考えるべきである。

会長：複式学級の解消を真っ先に考えていこうということ。

委員：市の財政は厳しいが、国際基準から見ても、子育て、学校への財源が少ないのではないかと。将来を見据えるならもっと充実すべきである。自分自身も複式学級を体験したが、半分は先生がいない状態であり、子どもには良くない。

委員：山村留学制度は、小学校の1～2年生は希望せず3～4年生から上が中心となる。中学生では進路のこともありムリだろう。親への経済的負担、地域の人にも運営の負担がかかるし、受け入れ学校数は減ってきているので、亀岡では山村留学ではなく特認校の方がマッチするのではないかと。地域、学校、自治体で色々な取組をやっていかないといけない。

委員：26年度の検討は今回が最後で、これまで色々と協議し情報も持ってもらった。27年度になって役員が変わると、次回に一からやり直すのは時間ももたないないので、議論の内容の引き継ぎをしっかりとお願いしたい。中学校区が8つあり地域ごとに問題がある。中学校区毎に、地域の問題を具体的に検討していきたい。実現不可能なものはやらないのと同じことであり、今の問題に対応していける実現可能なものを短期・中期・長期的に、時間やコストのかけ方も考えながら検討していく。良いアイデアを期待している。27年度は、中学校区毎に事務局でたたき台をつくり、議論をしてはどうかと考えている。以上提案である。

会長：多くの意見をいただいたが、資料3に整理された手法に各意見がはいっているのかと思う。特認校は限定されたものだが解決策の一つとなる。小中一貫校については多くの意見があったが、川東小学校・高田中学校でも実現しており問題解決の方法の一つとして支持がある。コミュニティスクールは、住民が経営し学校長のリーダーシップを大事にしていくことで大きな解決策の一つ。通学区域の見直しも多くの意見があったが、難しい問題もあるので、現実的に検討すべきである。通学区域の弾力化は、開かれた通学区

であり東京では試行的に行われている。これらが今日の意見かと思うが、その奥に社会全体の大きな問題が潜んでおり、また亀岡を愛することなども見据えながら、来年度具体的に考えていきたいと思う。今年度の議論のまとめを市長へ報告することになっている。

委員：子どもがどのように感じているのか。事例は少ないが、大規模校から小規模校へ変わったり、その逆の場合にどう思うだろうか。

会長：前回会議資料のアンケート集計結果に子どもへの聞き取り結果があるので、確認してもらいたい。以上で会議を終わりたい。

以上